Osaka University Knowledge Archive

Title	『是則集』注釈
Author(s)	
Citation	詞林. 1991, 10, p. 5-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67308
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

1

web公開に際し、
翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

【修辞】「そめ」、「みだれ」、「とく（「よる」）」は、糸の縁語。

【通釈】亭子院の歌合

新鮮な浅緑色に染めて、もつれさせてしまった柳の糸のような枝を、春風が吹き解いているのだろうか。

【他集】『金葉集』初度本　巻一・春・三三、詞書・作者「亭子院歌合に読める　坂上是則」　『新勅撰集』巻一・春上・二四、詞書・作者「（柳をよみ侍りける）　（伊勢）」、結句「風やよるらむ」　『新撰朗詠』一〇二、題・作者「（柳）　是則」、第二句「織りて乱るる」、結句「風やよるらむ」

『伊勢集』Ⅰ・一〇二、詞書「（亭子院歌合時）」、Ⅱ・一〇三、詞書「歌合の時亭子院」、結句「風やよるらむ」、Ⅲ・一〇一　『亭子院歌合』二、題・作者「（春　二月十首）　是則」結句「かぜやよるらむ」

【付】『伊勢集』と『新勅撰集』が伊勢作としており、作者名に混乱がある。結論から述べると、是則作とすべきであろう。

『新勅撰集』が伊勢作としているのは、定家本『伊勢集』を資

料としたためであるとの指摘が「『新勅撰集』の撰集－私家集尊重の姿勢をめぐって－」（生澤喜美恵　『和歌文学研究』五三号　一九八六年一〇月）にある。そこで、何故『伊勢集』がこの歌を採歌しているのかが問題となるのだが、その原因は『亭子院歌合』にあると思われる。『伊勢集』は「亭子院歌合時」という詞書のもとに、『亭子院歌合』の歌を数首載せており、その中にこの歌があるからである。

『伊勢集』がどのような『亭子院歌合』を資料としたかは定かではないのだが、『伊勢集』がこの歌を採歌した経緯として、次の二つが考えられる。一つは、この歌は『亭子院歌合』二番歌なのだが、一番歌が伊勢作であるために、誤って連続して採ってしまったという経緯。もう一つは、十巻本『亭子院歌合』で、二番歌の作者名が「いせヲ削リソノ上ニ重ネテこれのりト書キ、サラニこれのりミセケチ是則」（『平安朝歌合大成　一』の校異による）とあることから推測される。すなわち、この歌は伊勢作とされていた時期があったか、または実際に伊勢作であったために、『伊勢集』が採歌したという経緯である。もっとも、『亭子院歌合』に書かれていた最初の「いせ」は、ただの書き損じであり、すぐに訂正されたとも考えられるので、可能性は低い。『是則集』や現行の『亭子院歌合』、『金葉集』初度本等に従って、是則作と考えるのが妥当であろう。

ところで、片桐洋一「古今集歌壇と歌語」（『論集　古今和歌集』所収　笠間書院　一九八一）は「青柳の糸」という語が『万葉集』には【語釈】にあげたように巻十一に一例しかないのが、古今集撰者時代になって流行する現象に注目し、『赤人集』Ⅱ、『家持集』Ⅰに同歌が所載されていることから、古今集撰者時代の万葉歌語への傾倒ぶりをみてとっている。そういえば、「あさみどり」という語も『万葉集』には巻十に一例しかないが、同歌が『人麿集』Ⅲ、『赤人集』ⅠⅡ、『家持集』ⅠⅡに採られ、古今撰者時代には歌語として定着していたようだ。この一首、古今集撰者時代の万葉語享受のありかたの一端を示すものとして興味深い。

2

Web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

[redacted]

【通釈】桜

山里の花を見て

折ってしまうと、惜しむような様子だよ、この桜花は、では、

さあこの山里の家に宿を借りて、散るまではその美しさを堪能

しよう。

【他集】『古今集』巻一・春上・六五、詞書・作者「（題しらず　よみ人しらず）」、初句「をりとらば」、二句「をしげにもあるか」　『猿丸大夫集』Ⅰ・五一、詞書「やまにはな見にまかりてよめる」、初句「おりとらば」、二句「おしげなるかな」、結句「ちるまでもみむ」、Ⅱ・三三、詞書「或本ニ　山に花みにまかりてよめる」、初句「おりとらば」、二句「おしげにもあるか」『業平集』Ⅱ・八三、詞書「返し」、初句「おりとらば」、二句「おしげにもあるか」

【付】この歌は他集への入集状況から見て、是則作であることは疑問。この他7・10・11・12・25・34・40・41番も是則作ではないと思われる（各歌の【他集】の項参照）。『是則集』は部類名家集としての体裁（「解題」参照）を整えるため、他人詠をも積極的に取り入れていることを示していると考えられている。

またこの歌は、『業平集』では『古今集』六四番との贈答歌仕立てになっている。

3

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

[redacted]

【修辞】「くれたけの」は「よ」に掛る枕詞。「よ」は、「（竹の）節」と「夜」の掛詞。

【通釈】前栽の中に、桜の花が交じって咲いているのを見て桜花を、今日はことさらよく見ておこう、（呉竹に入り交じって咲く花は）呉竹の一節というように、一夜で散ってしまうといけないから。

【他集】『後撰集』巻二・春中・五四、詞書・作者「前栽に竹のなかにさくらのさきたるを見て　坂上是則」（諸本間で詞書に少々の異同があるが、「竹の中」という言葉はすべての本にある）、二句「けふよく見てむ」

[redacted]

4

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

[redacted]

【通釈】花を惜しむところで

このように桜を見ながら、千年の春を過ごしたとしても、いつ花の色の美しさに飽きるはずがあろうか（そんなことはないのだから、ずっと咲いていておくれ）。

【他集】『拾遺抄』巻五・賀・一八三『拾遺集』巻五・賀・二八七、共に詞書・作者「題不知　読人不知」。

【付】貫之に「延喜十八年四月東宮の御屏風、さくらの花のもとに人々のねたる所　かつ見つゝあかずと思ふに桜花ちりなん後ぞかねて恋しき」（『貫之集』Ⅰ・一〇五）という、初句を同じくする同主旨の歌があるが、この是則歌を参考にしたものか。

5

Web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

【修辞】「うつす」は「移す」と「映す」の掛詞。
【通釈】亭子院の歌合に
この美しい桜の花の色を、衣に移し染めるように、映して留めておいてくれ、鏡山よ、春が過ぎた後にも、桜の花の姿が留まるかしらと思うので。
【他集】『拾遺抄』巻一・春・五〇『拾遺集』巻一・春・七三、共に詞書・作者「亭子院歌合に　坂上是則」、四結句「春よりのちのかげやみゆると」　『古今六帖』かがみ・三二七、三句「ますかがみ」、四結句「春よりのちのかげやみゆると」
『亭子院歌合』二四、題・作者「（春　三月十首）　是則」、五句「かげやみゆると」（『平安朝歌合大成　一』によれば、二十巻本「のくれなむのちもみるべく」に「よりのちやかげやみゆると」を併記）　『和歌童蒙抄』第十・文字病難不例・八九六、作者「是則」、四結句「はるよりのちのかげやみゆると」
『和歌初学抄』秀句・鏡・四五、四結句「はるよりのちのかげやみゆると」
【付】「よろづ代のためしと見ゆる花の色をうつしとどめよ白河の水」（待賢門院兵衛　『今鏡』・「白河花宴」、『金葉集』二度本・巻一・春・三三）は、この歌の影響下にあると思われる。

6

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

【修辞】「なる」は、時の経過を表す「成る」と結実を示す「生る」の掛詞。

【通釈】亭子院歌合に

樹齢三千代にまでなって結実するという桃が、今年花が咲く春に――今年から三千の御代の栄華が花咲くめでたい春に、ちょうど巡り合ったなあ。

【他集】『拾遺抄』巻五・賀・一八四、詞書・作者「亭子院歌合に　（読人不知）」、初句「みちとせに」、四句「はなさく春に」　『拾遺集』巻五・賀・二八八、詞書・作者「亭子院歌合に　みつね」、初句「みちとせに」、四句「花さく春に」、結句「あひにけるかな」　『古今六帖』第一・五八、題・作者「みかの日　ただみね」、初句「みちとせに」、四句「花咲く春に」、結句「なりぞしにける」　『和漢朗詠集』巻上・四四、

題「（三月三日桃）」、「みちとせになるといふもものことしよりはなさくはるにあひそめにけり」　『躬恒集』Ⅱ・二一一、詞書「亭子院歌合に」、頭書「賀部」、初句「三千年に」、四句「花開春に」、結句「あひにける哉」　『忠岑集』Ⅰ・四八、詞書「三月三日、或所にてかはらけとりて」、初句「三千歳へて」、四句「花さくはるに」、結句「なりにけるかな」　Ⅱ・七七、詞書「三月三日あるところにてかはらけとりて　李嶠うた會も」、「みちよへてなるといふもゝはことしよりはなさくはるになりぞしにける」　Ⅲ・一一、詞書「三月三日、ある所にて」、初句「三千代へて」、四句「はなさくはるに」、結句「なりにけらしも」　Ⅳ・一四九、詞書「三月三日、あるところにて、ゝいじのゐんのうたあはせのうたとも」、初句「みちよへて」、四句「はなさくはるに」　『元輔集』Ⅰ・二四九、詞書「三月、もゝのはな」、初句「みちよへて」、二句「なるてふもゝは」、四句「はなさくはるに」、結句「なりにける哉」　『亭子院歌合』六、題・作者「（春　二月十首）　是則」、初句「みちよへて」、二句「なるてふももは」、四句「はなさくはるに」　『俊頼髄脳』初句「みちよへて」、四句「はなさく春に」　『和歌童蒙抄』巻七・木部・桃、初句「みちよへて」、四句「花さくはるに」、結句「あひにけるかな」　『和歌童蒙抄』巻十・歌合判題心難例、初句「みちよへて」、四句「花さく春に」、結句「あひそめにけり」　『奥義抄』中釈、初句「みちよへて」、四句「はなさく春に」　『袋草紙』下巻・古今歌合難、初句「みちよへて」、四句「花さくはるに」　『和歌色葉』下巻、作者「花山院」、初句「みちよへて」、二句「なるといふ桃の」、四句「花さく春に」　『悦目抄』初句「三千年に」、四句「花咲く春に」、結句「ぞしにける」に「にけるかなイ」と異本注記

【付】春の歌であるが慶賀的性格が強い。中国の故事を背景に、「三千代（三千歳）」、「百」を想起させる「もも」を詠み込み、不老長寿のシンボルである桃の開花と共に繁栄の始まりを寿いでいる。『興福寺延年舞式『羅婆婆』『尼羅婆』遊僧拍子歌の項や『大乗院新御門主隆遍維摩会御遂講行延年日記』（以上『日本庶民文化史料集成』第二巻所収　三一書房　一九七四）には、この歌が、初句「三千とせに」、四句「花さく春に」、結句「あふぞうれしき」として記録されており、延年に取り込まれていたことが確認できる。

この6番歌は、『亭子院歌合』において『是則集』7番歌（作者躬恒とする）と番いとなっている。作者は「今年」との同文字病をさけるため原典「三千歳」とあるのを「三千代」としたのであろうが、判者は「としとよむべきことをよといへりとてまく」、つまり故事との差異を根拠に負としている。『和歌童蒙抄』『袋草紙』はこの判詞をそのまま踏襲するが、『俊頼髄脳』は「これもとしと世とを病と、亭子の院の歌合にさだめられたり。文字病といふは心はかはりたれども、同じ文字あるをいふなり」、『左近権中将俊忠朝臣家歌合』一番判詞（判

者俊頼）は、「亭子院歌合にかや、山と峰と、年と世とを、同心のやまひにさだめられたれば」と同心病の例として、また『悦目抄』は「千年と年とを病とすと、亭子院歌合に定められたり。又文字の病とは、心かはりたれども同文字のあるなり」と同文字病の例として挙げており、誤解が生じている。底本以外の『是則集』諸本は初句を「みちとせに」とし、判詞に従って改められたものと同じ形を伝えている。

8

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

【修辞】「まつ」と「かげ」、「ふかみどり」と「いろ」、「ときは」と「うつろふ」がそれぞれ縁語。「かげ」は「木陰」と「お陰」、「よそ」は「余所（離れた場所）」と「外（無縁なこと、ひとごと）」の掛詞。

【通釈】松の木の根元に誰や彼や居て、深緑のとこしえに変わらない松の木陰に居て、その恩恵を蒙り、変化する他の草木の色を離れた所のものとして他人事のように見ることだよ。

【他集】『後撰集』巻一・春上・四二、詞書・作者「松のもとにこれかれ侍りて花をみやりて　坂上是則」、四句「うつろふ花を」　『古今六帖』第六・四一〇九、題・作者「（まつ　とものり二首）」、四句「うつろふ花を」　『三十六人撰』一一五、作者「（是則）」、四句「うつろふ花を」

【付】松に寄せて永遠の繁栄を寿ぐという多分に慶賀的な歌であり、作者を庇護する権力者への祝詞ともいえよう。詠まれた場は不明だが、「屏風絵の画中の人物の立場に立っての詠」（岩波新日本古典文学大系『後撰和歌集』）という見方もある。「よしみねのつねなりがよそぢの賀にむすめにかはりてよみ侍りける　よろづ世を松にぞ君をいはひつるちとせのかげにすまむと思へば」（『古今集』巻七・賀・三五六・素性法師）の影響を受けているか。発想的には、「延長四年八月廿四日、民部卿清貫が六十賀中納言恒佐妻し侍りける時の屏風に、かぐらする所のうた　あしひきの山のさかきはときはなるかげにさかゆる神のきねかな」（『拾遺集』巻十・神楽歌・六一八・紀貫之）にも似る。

7

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

[redacted]

【通釈】亭子院歌合に

繰り返しやって来ては鳴く鶯の故郷は散ってしまった梅の花であったことよ。

【他集】『新勅撰集』巻一・春歌上・三六、詞書・作者「亭子院歌合に　坂上是則」、結句「花にぞありける」　『古今六帖』第二・一三〇三、題・作者「（ふるさと）　おきかぜ」　『興

風集』Ⅰ・二一、結句「花にぞ有ける」　Ⅱ・六、結句「花にぞありける」　『躬恒集』Ⅰ・五一、詞書「（延喜十二年三月十八日亭子院歌合に、二月）　みつね左方」　Ⅲ・七八、集付「新勅坂上是則歌也」　Ⅲ・一五四、詞書「（延喜十二年三月十八日亭子院の和歌合に）」、集付「新勅坂上是則歌也」、結句「花にぞありける」、割注「此歌有両首司勘也」　Ⅴ・七二、詞書「（おなじ院の歌合の、左かたにてよめる）」　『亭子院歌合』五、題・作者「（春　二月十首）　躬恒」

【付】以上三首は本によって順序が異なり、書A・書B・歌仙は六番歌（桃）、七番歌（鶯）、八番歌（松）の順、底本・西・静・群・彰は六番歌、八番歌、七番歌の順に並ぶ。冒頭に記された部類分は、書A・書B・歌仙・静においては、柳、桜、桃、松、鶯、また西本においては桜、桃、鶯である。よって題の順序と歌の配列との間に齟齬を来していないのは、静本と、不完全な形ではあるが西本である。

9

Web公開に際し、
翻刻は省略しました

【修辞】「まつ」は「先づ」と「待つ」の掛詞。

【通釈】夏

郭公

山人だと人は軽蔑して言うけれども、人々が待ち望む郭公の初声はまず私だけが聞くのだ。

【他集】『拾遺抄』巻二・夏・六三、詞書・作者「女四親王の屏風　是則」　『拾遺集』巻二・夏・一〇三、詞書・作者「女四のみこの家歌合に　坂上是則」（京都市北野天満宮本詞書「女四親王の家の屏風に」）　『三十人撰』九四、作者「（是則三首）」　『三十六人撰』一一四、作者「（是則）」

【付】鄙びた非文化的生活を送っているように見えるが、その反面、都人が待つ郭公の初声を、「山ざとにしる人もがな郭公なきぬときかばつげにくるがに」（『拾遺集』巻二・夏・九八・紀貫之）の如く、彼らよりも一足早く聞くことができる、つまり自分こそ真の風流人であるのだという、逆説的な一種の優越感がにじみ出ている。「野辺ちかくいへゐしせればうぐひすのなくなるこゑはあさなあさなきく」（『古今集』巻一・春上・一六・読人不知）に通ずる心がある。屏風画中の人物となっての詠歌という印象を受ける。

『拾遺抄』『拾遺集』詞書に見える「女四親王」とは醍醐天皇第四皇女勤子内親王（『平安朝歌合大成　一』、岩波新日本古典文学大系『拾遺和歌集』）。勤子内親王御屏風については、延喜十八年作成されたことと（延喜十四年に作成されたのは女一親王勧子内親王屏風と思われる）、凡河内躬恒や紀貫之等の詠進があったことが、『拾遺集』（一二九、二二一）、『新拾遺集』（五二〇）、『貫之集』（I・九七～一〇四）等によって、確認できる。歌合については不詳。定家本拾遺集の誤りとも考えられる。

10

web公開に際し、
翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

[redacted]

【通釈】秋

時雨　露　山　水　紅葉　菊　雁

時雨　亭子院歌合に

初時雨が降るとまもなく佐保山の木々の梢が残らずすみずみまで紅葉してしまったなあ。

【他集】『後撰集』巻八・冬・四四四、詞書・作者「（題しらず　よみ人も）」、結句「うつろひにけり」（定家無年号A類本、慈円本、片仮名本、二荒山神社本、慶長本、富小路資直筆本、梅沢氏蔵本、飛鳥井教定書写奥書本「いろづきにけり」）

『古今六帖』第一・五〇六、題・作者「（しぐれ　五首つらゆき）」、四句「もみぢあまねく」

【付】秋の歌がこの10番歌から七題十二首続く。後に続く歌の内容から考えると、「山」と「水」は別個の題でなければならないのだが、書A・書Bは「山河」、西本は「山川」と一題にされており、また静本は「山風」とあって、歌の内容と一致しない。よって部類分を記す本の中では底本と歌仙本が最も整っていることになる。

10番歌は、「鍾礼能雨（シグレノアメ）　無間零者（マナクレフレバ）　三笠山（ミカサヤマ）　木末（コヌエ）　歴（アマネク）　色附（イロヅキ）尓家里（ニケリ）」（『万葉集』巻八・秋雑・一五五七・大伴稲公）の影響を受け、一方「はつ時雨ふるほどもなくしもとゆふかづらき山は色づきにけり」（『千載集』巻五・秋下・三五三・覚性法親王）に影響を与えていると思われる。

11

[redacted]

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

[redacted]

【修辞】「つゆ」と「たま」、「ぬく」と「かく」は縁語。

【通釈】秋の野に露が置いているところ
秋の野に置くこの美しい白露が、もしいつまでも消えないのであれば、玉として糸を通してかけて見るのになあ。

【他集】『後撰集』巻六・秋中・三一二、詞書・作者「（題しらず　よみ人も）」

【付】この歌は群本では末尾に置かれている。

[redacted]

12番は定家本では欠けているので、書陵部A本を底本とする。

12

公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

[redacted]

【通釈】平凡に置いている白露も、今後はよく気をつけて見るべきであろうなあ。

【他集】『後撰集』巻六・秋中・二九一、詞書・作者「（題しらず　よみ人も）」

【付】独立した一首としてみた場合、意味するところが明らかとは言い難い。『後撰集』二荒山本・片仮名本・承保本・正徹本などでは詞書「かへし」とあり、「題しらず　秋の夜をいたづらにのみおきあかす露はわが身のうへにぞ有りける」（二九〇・読人不知）への返歌とされており、『後撰集』諸注釈書は、それをふまえたうえで、解釈している。ここでもそれをふまえての解釈を示せば、【通釈】に示した訳に「通り一ぺんのいいかげんな気持ちで起きている人にも気をつけなければ」の意味が加わる。その場合は、白露を「置く」に「起く」をかけるものと思われる。「つれもなき人をやねたくしらつゆのおくとはなげきぬとはしのばむ」（『古今集』巻十一・恋一・四八六・読人不知）他類例多数。

13

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

【修辞】「おぐら」は「小暗し」という意と地名の「小倉山」との掛詞。

【通釈】秋の山を望む　大井川行幸に

秋の山にあるさまざまな草木がすべて色は鮮やかなのに、誰が小倉の山を暗い山と名付けたのだろう。

【他集】『続後拾遺集』巻五・秋下・三八六、詞書・作者「亭子院にしかはにおはしましける日、望秋山といふ事を題にてよみ侍りける　（坂上是則）」、結句「いふらむ」　『秋風和歌集』秋上・四二三、詞書・作者「延喜七年亭子院大井におはしまして侍りけるに、望秋山といふことをつかうまつりける　是則」、結句「いふらむ」

【付】大井川行幸は九つの漢詩題に従って、貫之、躬恒、頼基、是則、忠岑、伊衡の六人によって同題和歌が詠まれた。九つの題は『躬恒集』Ⅳによれば、秋水に浮かべり・秋山に望む・紅葉落つ・黄菊残れり・鶴州に立てり・旅の雁行く・鴎馴れたり・猿峡に鳴く・江の松老いたりとなる。当時の和歌は、『古今集』以下の勅撰集に六首、躬恒、是則、頼基、忠岑の家集にそれぞれ残存している。なお、『日本紀略』延喜七年九月十日の条は「法皇召二文人一。賦二眺望九詠之詩一」と賦詩のことのみを記すが、それにもかかわらず、当時の詩はほとんど散逸しているとされていた。しかし、『書苑』十巻九号（一九二〇年二月）に図版として収載された「東京郷男爵家蔵」の「藤原行成卿筆詩懐紙」なる一葉に載る四首の漢詩が大井川行幸の漢詩であるとの指摘があった（後藤昭雄「漢詩文と和歌―延喜七年大井河御幸詩について―」『論集　和歌とは何か』所収　笠間書院　一九八四）。なお、詳しくは「補注」参照。

14

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

【通釈】秋、水に浮かぶ　大井川の行幸
どちらがとまる場所なのだろうか。山風が散らせた紅葉のせいで、船路に迷ってしまった。

【修辞】「とまり」と「ふなぢ」、「山風」と「はらふ」は縁語。

【付】大井川行幸時の同題和歌については「補注」参照。

15

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

[redacted]

【通釈】紅葉

峰が高いので、出かけて行って、やっと見ることが出来る紅葉の葉を、今日は動かないままでも、髪に挿して身近に観賞していることであるよ。

【他集】『後撰集』巻十八・雑四・一三〇二、詞書・作者「おなじ心を　坂上是則」

【付】大井川行幸時の漢詩については「補注」参照。

[redacted]

16

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

[redacted]

【通釈】秋の歌として詠む

佐保山のははその木の紅葉の色は薄いけれど、秋は深くなったことであるよ。

【他集】『古今集』巻五・秋下・二六七、詞書・作者「秋のうたとてよめる　坂上是則」、二句「ははその色は」　『左兵衛佐定文歌合』　一六、作者「是則」　『古今六帖』第一・ながつき・一八三、作者「これのり」、二句「ははその色は」『古今六帖』第六・ははそ・四〇九四、作者「これのり」三句「ははその色は」

【付】『左兵衛佐定文歌合』は延喜五年四月二八日に主催された撰歌合。四季、恋の十二題二十番で勝負付がある。左方には、壬生忠岑、在原元方、平定文の歌が採られ、右方には、坂上是則、紀貫之、凡河内躬恒の歌が採られている。この歌合から、同年奏覧の『古今集』歌に六首入集し、『拾遺集』など後続の勅撰集にも多く入集している。是則の歌は、「暮秋」という題で、「あきやまはからくれなゐになりにけりいくしほしぐれふりてそめけむ」（読人不知）という左方の歌に勝っている。なお、「解題」の項も参照。また、ははその紅葉は色がうすいのに、秋は深まっていくという「うすい」と「ふかい」の対照的な表現はこの歌の面白い趣向であるといえよう。

17

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

【通釈】紅葉散る　大井川の行幸

紅葉した葉が落ちて流れている大井川、そのあちらこちらの瀬に寄る白波よ、（紅葉の葉を流してしまうのならば）せめて水に映る影だけでもとどめてほしい。

【他集】『続後撰集』巻八・冬・四七二、詞書・作者「延喜七年大井河に行幸時　坂上是則」、四句「せぜのしがらみ」

【付】この歌は、木から落ちる、川に流れていくという紅葉の二つの姿の美しさを同時に詠み込んだ歌である。主題は川に流れていく紅葉の美しさにあるのだが、流れる姿そのものではなく水面に映る影を詠むことで、その姿の美しさを浮かび上がらせている。

これは大井川行幸の時詠まれた歌である。同じ題で詠まれた歌・漢詩については「補注」参照。

18

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

[redacted]

【通釈】もし紅葉の葉が流れないならば、竜田川の水に秋があるということをだれが知るだろうか、いやだれも知らないだろう。

【他集】『古今集』巻五・秋下・三〇二、詞書・作者「たつた河のほとりにてよめる　坂上これのり」　『古今六帖』第六・四〇八八、作者「これのり」

19

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

【付】この歌は竜田川に紅葉が流れることで、季節によって変化のないはずの水にも秋が存在するということを知る、というものである。この発想は【語釈】の「たつたがは」の項であげた『古今集』二八四番歌の「竜田川に紅葉が流れることによって三室山に時雨が降るらしい」と推測しているものと類似しており、その影響を受けていると考えられる。

一方、「水の秋」という表現は後続の歌人たちに影響を与え、さかんに用いられている。影響の著しいものに「竜田川水の秋をやいそぐらんもみぢをさそふ峰の嵐に」（『続千載集』巻五・秋下・五八三・藤原為子）、「からにしきたつたの河の紅葉ばに水の秋こそ猶のこりけれ」（『続千載集』巻六・冬・六一二・藤原公雄）」などがある。

web公開に際し、翻刻は省略しました

[redacted]

【修辞】「きく」は「菊」と「聞く」との掛詞。
【通釈】菊の花が残っている　大井川の行幸
水に映った影でさえも今はもう色が変わったと聞いているけれども、その菊の花が変色するのは川浪の底にも霜が置いているからであろうか。
【他集】『新古今集』巻六・冬・六一三、詞書・作者「おなじ御時、大井河に行幸侍りける日　坂上是則」
【付】この歌は、霜によって変色した菊の花が水に映っているのを、水底にも霜が置いたせいで変色してしまったとし、見えない波の底を思いやって詠んだ機知の歌である。発想の類似した歌として【語釈】にあげたもののほか「山がはの月のうつれるをみはべりて　秋のつきなみのそこにぞいりにけるまつらむやまのかひやなからむ」（『能宣集』Ⅰ・四九）、「ふぢのはなにほふなぎさにこぎよらばなみのそこなるかげやちりなむ」（『元輔集』Ⅲ・七八）などがある。
大井川行幸の時に同じ題で詠まれた歌・漢詩については「補注」参照。
なお、「大井河行幸、きくの花きしにのこりてそらなるほしかとおどろかれ　きしちかくまれにのこれる菊の花あまのかはせの心ちすらしも」（『夫木抄』巻十四・秋五・五八七九・花山院）はこの大井川行幸を意識して詠んだ歌であろう。

20

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

【通釈】旅の雁　大井川の行幸

何千里ある道なのだろうか、雲居はるかな旅をするのだということを、秋ごとに雁が鳴きながら告げているのだろう。

【他集】『新拾遺集』巻五・秋下・四九六、詞書・作者「題しらず　坂上是則」、四句「雲井の旅と」、結句「なくらん」

【付】『新後拾遺集』の「いく千里程は雲ゐの秋ごとに都を旅と雁のきぬらむ」（巻四・秋上・三三六・坂上是則）はこの歌の異伝歌。

大井川行幸の時同じ題で詠まれた歌については「補注」参照。

なお、「大井川行幸に、旅雁雲にまがひてたまづさとみゆ大ぞらにうちむれてとぶかりがねはみどりのかみのふみかとぞ

みる」（『夫木抄』巻十二・秋三・四九二七・花山院）はこの大井川行幸を意識して詠んだ歌であろう。

21

[redacted]

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

[redacted]

【修辞】「かりてほす山だのいねの」は「こきたる」を導く序詞。「こきたれて」は「こきこぼれて」と「（涙が）ぽろぽろとしきりに流れて」の意を掛ける。「わたれ」は「しきりと」と「渡る」の掛詞。

【通釈】刈って干す山田の稲がしごきこぼれて実が落ちるように、ぽろぽろと涙を流し続けて雁がしきりに鳴いて空を渡っていくことだ、秋がつらいので。

【他集】『古今集』巻十七・雑上・九三一、詞書・作者「屏風のゑによみあはせてかきける　坂上これのり」　『古今六帖』第二・九六六、山だ、四句「ねをこそなかめ」、結句「人はうらみじ」

【付】【他集】であげたように、この歌は『古今集』に入集しているが、これを『古今集』所収歌として解釈する場合、「なく」主体については次の三説がある。すなわち、初句の「かり」に「雁」が詠み込まれ、「なく」には「鳴く」と「泣く」が掛けられているとして、雁は鳴きながら空を渡っていき、自分は泣いて日を送るとする説（『金子評釈』、『大系』、『集成』）と、「かり」には「刈り」の意味しかないとみて、自分が泣いているとする説（『竹岡全評釈』）、この歌の主題は初句に詠み込まれている「雁」で、雁が鳴いて空を渡っていくとする説（『全集』、『新大系』）である。この歌は『古今集』所収歌の詞書によれば屏風歌である。その絵柄については『金子評釈』では「刈りほした稲塚があつて、賤の夫が稲をこきおろすところで、空には雁が列を成して、鳴き渡るさまであつたらう」と推測し、『集成』では「晩秋の田園風景と想像される。雁が空をわたり、家々では稲こきが始まっている」と解説している。また『竹岡全評釈』では「山田の稲刈・稲こきのわびしい光景の絵であろう」とし、その上でこの歌は屏風の絵の光景またはそのムードに合わせて、作者自身の述懐を詠んだものと説明している。この歌を『古今集』歌として見る場合は、屏風歌と考えるべきであり、先にあげた種々の解釈が成り立つ。しかし『是則集』中の歌として解釈する場合、詞書を持たないところから、実景を詠んだものと考えられ、屏風の絵を問題にする必要はないと思われる。また「雁」の部に部類されていることからすると、この歌の主題は雁であり、「なく」主体は「雁」だと考えてよいだろう。【語釈】の項では以上のようなことから「なく」主体を「雁」として解釈した。

【語釈】の項にあげた歌にみられるように、「山だのいね」

は稲刈の屏風の歌の中で詠まれることが多かったことがうかがえる。同じく「あきしうければ」の項などを考えあわせると、この歌は発想の上でも表現の上でも古今集時代の類型的な歌ということができるであろう。

22

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

【通釈】冬

雪　氷

大和の国へ下った時に雪が降ったのをみて詠んだ歌

夜がほのかに明けてきた頃、有明の月が辺りを照らしているのかと見まがうほどに、吉野の里に降っている白雪であるよ。

【他集】『古今集』巻六・冬・三三二、詞書・作者「やまとのくににまかれりける時に、ゆきのふりけるを見てよめる　坂上これのり」、　三句「みゆるまで」（毘沙門堂註本）、四句「よしののやまに」（筋切・元永本・基俊本・為相本・雅俗山荘本）

『古今六帖』第一・ゆき・七三一、四句「よしのの山に」『百人一首』三一　『俊成三十六人歌合』八六　『近代秀歌』五四　『詠歌大概』六三　その他。

【付】この歌は「よしののさと」・「よしののやま」の異同に関わらず、吉野での詠作と考えられるから、詞書にいう「山とのくに」はすなわち吉野を指していよう。次の23歌は詞書からも知られるように、「ならの京」で吉野の雪に思いを致してい

るものであるから、詠作の場を異にする。強いて連作と考える必要もなかろう。『窪田評釈』は『古今餘材抄』を引きながら、『是則集』における連作の可能性を探ろうとし、「思ふに、撰集の際、『吉野の里に』のしめやかさに心引かれて、撰者が加筆し、言書をも改めたのではないか」とするのは、『是則集』・『古今集』各伝本の本文異同からも検討の余地があるが、さらに続けて、「この例は少なくないやうだからである」とすることについては、必ずしもそうはいえない事を【語釈】の項でふれた。

また、歌語としての「ありあけの月」に関しては、細田恵子「八代集のありあけのイメージ」（『文学史研究』第十五号一九七四・七）に詳しい。ただし、是則歌を引きながら、「古今集では、『冬のありあけ月』を直接に美的対象として把握することはなかったということになる」とするのは趣旨は理解できるものの、むしろ、吉野の里（山）という場における、有明の月の光による美と初冬に降った真白な雪の美との二重のイメージを一首の中に描き切った点に注目すべきであろう。

いわゆる「見立て」の技法に関しては、片桐洋一「『見立て』とその時代―古今集表現史の一章として―」（『論集　和歌とレトリック』所収　笠間書院　一九八六）に詳しく、和歌の「見立て」の発生を漢詩の表現の影響と認め、さらに「～と見る」のような形を「見立て」の基本形として、「このような形の見立ての歌は、今まで漢詩のみが担っていた晴の文芸としての役割を和歌が分担しようとした宇多朝歌壇において爆発的に流行した」と説いている。

なお、『古今和歌集目録』によると、是則は延喜八年正月に大和権少掾（『三十六人歌仙伝』は「大和掾」）、同年八月に大和権掾（『三十六人歌仙伝』は「大和大掾」）に任ぜられている。

23

web公開に際し、
翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

[redacted]

【通釈】奈良の京に下って宿をとっているところで詠んだ歌
吉野の山の白雪がどうも降り積もっているらしい、このならの古い京も次第に寒さが募ってきたからなあ。

【他集】『古今集』巻六・冬・三二五、詞書・作者「ならの京にまかれりける時にやどれりける所にてよめる　坂上これのり」

24

Web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

『古今六帖』第一・二三九、作者「これのり」　『金玉集』冬・三八、作者「坂上これのり」　『和漢朗詠集』巻上・冬・雪・三八二、作者「是則」　『寛平御時中宮歌合』（『后宮胤子歌合』）二五、題・作者「冬　坂上是則」　『左兵衛佐定文歌合』二〇、題・作者「晩冬　是則」

【付】清輔『古今集勘物・書入』には「此歌、定文家歌合歌也」とある。『左兵衛佐定文歌合』については16番歌の【付】参照。
『寛平御時中宮歌合』は、『后宮胤子歌合』・『寛平御時后宮歌合』とも。『廿巻本歌合目録』によると、宇多帝の女御、藤原胤子の主催になり、寛平八年以前と考えられる。

[redacted]

【修辞】「とぢ」は「水が凍る」の意と、「表面を閉じる」の意の掛詞。

【通釈】氷　冬の歌

冬の池の表面は水が凍って氷で閉じているのに、どうして月が水底にみえているのだろう。

【他集】『拾遺集』巻四・冬・二四一、詞書・作者「題しらず　よみ人しらず」　三句「とぢられて」、結句「そこにいるらなお、是則集底本の本文は『拾遺抄』とのみ一致する。

25

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

ん」　『拾遺抄』巻四・冬・一五三、詞書・作者「題不知　読人不知」　『新撰万葉集』下・四二六　三句「閉鶴緒（トヂフルヲ）」、結句「底丹入兼（ソコニイリケム）」　『古今六帖』第一・三一五、詞書「ふゆの月」　結句「空にいるらん」　『寛平御時后宮歌合』一三七、題・作者「冬　是則」　二、三句「こほりてとぢたるを」、結句「そこにすむらん」

【付】冬の池が詠まれる場合、「冬の池にすむにほどりのつれもなく氷の下をわれはかよはん」（『古今六帖』第一・こほり・七七三）や、「ただのこひ　しもこほりこころもとけぬ冬のいけによふけてぞ鳴くをしのひと声」（『元真集』・一六四、後に『新古今集』巻十一・恋一・一〇五九に入集）のように凍りついた水面を詠み込み恋歌となるものが多いが、ここではそれらとは趣きを異にし、軽い戯れをも含んだ機知を感じさせる歌となっている。

web公開に際し、翻刻は省略しました

【修辞】「きて」は「来て」と「着て」との掛詞。

【通釈】祝

若　巌

わが君の御代は、天の羽衣を着た天人がまれにやって来て、その羽衣で撫でても尽きることがないという巌のように永遠であってほしいものだ。

【他集】『拾遺集』巻五・賀・二九九、詞書・作者「題しらずよみ人しらず」　『拾遺抄』巻五・賀・一九三、詞書・作者「題不知　読人不知」　『天徳四年内裏歌合』に「その左のう

たのすはまのおほひに、あしでをぬひものにしたる歌」（四四）として載る。

【付】群本を除く諸本は、「いはほ」の前に「こけ」の歌が配されることを記すが、諸本にみあたらない。歌の欠脱があるか。

26

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

27

[redacted]

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

【通釈】恋部

知られない（思い）　知られた（思い）　逢う　逢った後

知られない（思い）

海の底に潜って（その深さを）確かめよう、あなたに知られることもなく私があなたを思う心がどんなに深いかを海の深さと比べるために。

【他集】『後撰集』巻十一・恋三・七四五、詞書・作者「題しらず　これのり」　三句「君がため」　『続後撰集』異本歌・一三七七、詞書・作者「（題しらず）　（よみ人しらず）」『古今六帖』第三・うみ・一七五一、作者「これのり」

web公開に際し、翻刻は省略しました

【修辞】「くらぶ」は「暗部山」と「比ぶ」の掛詞。

【通釈】知られた（思い）

私の思いに比べると、暗部山の桜花が絶え間なく次々と散るとしても、その多さは、私の恋の激しさにまさることはあるまい。

【他集】『古今集』巻十二・恋二・五九〇、詞書・作者「題しらず　坂上これのり」　『古今六帖』六・四二二九、詞書・作者「山ざくら　これひら」　ともに初句「わがこひに」

【付】『新大系』付録、「派生歌一覧」では、藤原定家作「思ひつる後の心にくらぶ山よそなる花の色はいろかは」（『拾遺愚草』恋二十五首寄名所、一一六三）を指摘している。

28

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

【修辞】第三句までは「しげき」を導く序詞。
【通釈】牡鹿の臥している夏の野原には草がうっそうと生い茂って道が見えず、（猟師も）迷ってしまうように、恋を成就する手段もない私も深い恋に迷うこの頃だなあ。

【他集】『新古今集』巻十一・恋一・一〇六九、詞書・作者「題しらず　坂上是則」　『俊成三十六人歌合』八七・作者「坂上是則」　『時代不同歌合』一三七・作者「坂上是則」三書ともに三句「みちをなみ」、四句「しげき恋ぢに」

【付】「をじかふすはるののくさのふかければさつをのゆみちほしばかりみゆ」（『山家五番歌合』一番左・一一・題「野草」・源顕国）は是則歌に発想を得たものと思われる。

29

web公開に際し、
翻刻は省略しました

【修辞】第三句までは「はれず」を導く序詞。

【通釈】秋の山に朝立つ霧がその峰をこめてしまい晴れないように、私の心も晴れないのは、恋しい人を慕っているからだろ

うなあ。

【他集】『続千載集』巻十四・恋歌四・一四二一、詞書・作者「題不知　坂上是則」　初句「秋山に」、五句「おもふころかな」

30

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

【修辞】第三句までは「みだれて」を導く序詞。

【通釈】霜枯れの浅茅の根元の刈萱が乱れているように、恋に心も乱れて物思う頃であるよ。

【他集】『新古今集』巻四・秋上・三四五、詞書・作者「題しらず　坂上是則」、初句「うらがるる」、二句「浅茅がはらの」

【付】『新古今集』では、この歌が「恋」ではなく「秋」上部に分類されたことについて、窪田空穂『完本新古今集評釈』では「四五句だけを見れば、晩秋の哀感か、また恋の上の哀感かの差別のつかないものである」と評されている。また、久保田淳『新古今和歌集全評釈』では、「作意は晩秋の哀感である」とする窪田の言を引用し、「集としては秋上であるから、晩秋の歌と解してここに置いたとは考えられない。草もみじは木々のもみじより早く、ちがやは秋になるとまもなく「うら枯るゝ」という状態になると考えられていたのではないか」と評されている。

31

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

【通釈】枕だけが浮くと思っていた涙川に、今は恋の思いに堪えかねてこの身が沈んでしまうのだなあ。

【他集】『新古今集』巻十五・恋五・一三五七、詞書・作者「題しらず　坂上是則」

【付】久保田淳『新古今和歌集全評釈』ではこの歌について、「これもまた、遊びの要素の強い恋の歌である。そして、これは臣下の歌なので評判がよくない。本集に誹諧歌の部があれば、当然そこに入れられるべき歌であろう」と評されている。

32番は底本では欠けているので、書陵部A本を底本とする。

32

web公開に際し、
翻刻は省略しました

【通釈】恋しているとは、心がくれないの色に染まり、涙が血のくれないの色に変わって、はっきりと目に見せ、示してくれるのだったなあ。

【他集】『続古今集』巻十一・恋・九五二、詞書・作者「（初恋のこころを）　坂上是則」、三句「こひねども」　『万代集』巻九・恋一・一九三七、詞書・作者「（題不知）　是則」、三句「こひねども」

【付】恋の想いを涙によって知った、という歌には、「見し夢の思ひいでらるるよひごとにいはぬをしるは涙なりけり」（『後撰集』巻十二・恋四・八二五・伊勢）などがある。なお、「しのぶればなみだぞしるきくれなゐにものおもふそではそむべかりけり」（『金葉集』三奏本・巻七・恋・四一二・源道済）は、この32番歌の影響歌か。

33

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

[redacted]

【修辞】「うらみ」は「うみ」の縁語。また、「うらみ」は「浦見」と「恨み」の掛詞。

【通釈】（私の恋は、片思いの涙があまりに深くたまってできたために、）潜っても採ることのできない涙が磯の鮑であるから、海という海はすべて浦を見てまわって恨み尽くした。

【他集】『古今六帖』第三・一七五二、題「うみ」、初句「かづき出でぬ」、四句「うみてふうみは」、結句「かづきつくしつ」　『夫木抄』巻二六・雑八・一二〇五一、詞書・作者「題不知㊀　読人不知」、歌句は『古今六帖』に同じ

【付】「かづきえぬ」理由としては、片思いに流す涙があまりに多く、深い海となったので、海中に潜っても鮑を採ることができない、ということが考えられる。【通釈】でもそう解釈した。しかし、片思いの涙でできた「涙が磯」は、心の中の光景であり、実在の場所でないために潜ることができない、と解釈することもできる。この場合下句は、実在しない「涙が磯」に潜れないために、本当の海まで恨んでしまう、という機知を含んだ歌となる。だが、あまりに機知に傾きすぎているのでこの解釈はとらない。

「かづきえぬ」を「かつきえぬ」と清音にとった場合、「かつ」は相反する動作・作用が並列して行われることを示す副詞である。「きえ」を「消ゆ」の連用形、「ぬ」を完了の助動詞の終止形と考えると、初句切れの歌となり、「かつきえぬ……うらみつくしつ」と終止形が重なって不自然である。また、「きえ」を「消ゆ」の未然形、「ぬ」を打消の助動詞の連体形と考えると、「きえぬ」は「涙」を修飾することになるが、「涙」が「消える」という表現は見当たらず、不自然である。

34

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

【修辞】「より」、「あはす」、「緒」は「かたいと」の縁語。また、「あふ」は「合ふ」と「逢ふ」の、「たまのを」は「玉の緒」と「生命」の掛詞。

【通釈】片糸を、こちら、あちらによりかけていって、それでももし合わないならば、何を、玉を貫き通す緒にしよう―さまざまに思いをかけ、心を砕いて、それでももし逢えないならば、何を魂をつないでおく命の緒としよう。

【他集】『古今集』巻十一・恋一・四八三、詞書・作者「題不知　読人しらず」　『古今六帖』第五、三二一〇

【付】「くりかへしたのめてもなほあふことのかたいとをやはたまのをにせん」（『千五百番歌合』恋二・千二百四十七番・左・二四九二・藤原良経）の判に「左歌、かたいとをこなたかなたによりかけてあはずはなにをたまのをにせん、と侍る歌にて、ひとふしをかしくむすびなされて侍る歟」（判者・顕昭）

とある。この是則歌は古来有名であり、同時代にも「逢ふ事のかた糸ぞとはしりながら玉のをばかり何によりけん」（『後撰集』巻九・恋一・五五〇・是忠親王）等の類歌が見られる。また、「かたいと」の語は、『万葉集』に三例、『古今集』に二例見られるのみであるが、是則以後は非常に多くの用例が見られるようになる。

35

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

【修辞】「たにふかみいはまをたぎつ山がはの」は「をと」を導く序詞。また、「をと」は「音」と「うわさ」の掛詞。

【通釈】谷が深いので岩と岩の間をはげしい勢いで流れている山川の音ではないが、あなたのうわさをきくだけで恋し続けていられるだろうか。

【付】類似の歌として、「たに河の岩まを分て行水の音にのみやはき丶わたるべき」（『兼盛集』Ⅰ・二七）がある。また、「噂をきいて恋しく思う」という意味の類想歌としては、「逢ふ事はくもゐはるかになる神のおとにききつつこひ渡るかな」（『古今集』巻十一・恋一・四八二・紀貫之）等があげられる。また、「たにせばきいはまをたぎつみやまがはわりなき世にもすみわたるかな」（『新撰六帖』第二帖・五三七・藤原為家）はこの歌の影響をうけていると考えられる。

36

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

【通釈】恋しいと思う気持ちにせめて限りのある男女の仲であったならば、長い年月を経て物思いに悩むことはなかったであろうに。

【他集】『続古今集』巻十四・恋四・一三〇六、詞書・作者

「題不知　坂上是則」　『古今六帖』第五・二五七一、四句「としへば」　『万代集』巻十二・恋三・二三四八、作者「是則」

【付】「長い間恋い慕う」という意味の類想歌として、「おとは山おとにききつつ相坂の関のこのたに年をふるかな」（『古今集』巻十一・恋一・四七三・在原元方）等があげられる。

37

web公開に際し、
翻刻は省略しました

【修辞】「ながらのはしの」は「ながらへて」を導く序詞。また、「ながらのはし」の「な」は「無」の意を掛けている。「わたる」は「はし」の縁語。

【通釈】あなたにお会いすることもなく、長柄の橋ではないが生きながらえて、あなたをずっと恋しく思っている間に、年をとってしまったことだ。

【他集】『古今集』巻十五・恋五・八二六、詞書・作者「題不知　坂上是則」　『古今六帖』第五・二五六八、詞書・作者「としへていふ　これのり」

【付】『竹岡全評釈』によると、「ながら」の「な」を「無」にかけて解する説と、そう解さず、「あふことを」を直接下の「こひ渡る」に続ける説とがある。前者に解する例として、『古今栄華抄』、『古今和歌集打聴』等、後者にあてはまるものとしては、『古今和歌集正義』等がある。また、「長柄橋」は、『日本後紀』（巻二二・嵯峨天皇・弘仁三年六月己丑条）に、「遣使造摂津国長柄橋」の記録が見られる。『文徳実録』（巻五・文徳天皇・仁寿三年十月戊辰条）に「摂津国奏言。長柄三国両河。頃年橋梁断絶。人馬不通。請准堀江川。置二隻船。以通済渡。許之。」とあり、橋が破損したことも少なくなかったらしい。そのため、「ながらのはしのながらへて」というよりは、「われればかりながらのはしはくちにけりなにはのこともふるるかなしな」（『後拾遺集』第十八・雑四・一〇七三・赤染衛門）や、「なにはなるながらのはしもつくるなり今はわが身をなににたとへむ」（『古今集』巻十九・雑・伊勢）のように、「くちる」や「つくる」などの語とともに詠まれることが多かったようである。

また、時代は下るが、『民部卿家歌合』の「忍びつつ恋ひわたるまに朽ちにけりながらの橋を又や作らむ」（一八九・藤原隆房）は、是則37番歌の影響を受けていると思われる。

38

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

【通釈】逢う

お逢いして愛情をかわしたならば、この物思いの心も晴れることかと思っていた、なのに、それどころか実際には、あなたとの逢瀬の余韻に心が惹かれ、苦しいほどに恋しい気持ちがつのってくることだよ。

【他集】『後撰集』巻十二・恋四・七九四、詞書・作者「人のもとよりかへりまできてつかはしける　坂上これのり」、三句「思ひしに」　『拾遺集』巻十二・恋二・七一一、詞書・作者「題不知　坂上是則」

【付】「あひみて」のちのなごりが「わびし」いという発想の類想歌としては、「あづまぢのさやの中山中中にあひ見てのちぞわびしかりける」（『後撰集』巻九・恋一・五〇七・源宗于）がある。

39

web公開に際し、
翻刻は省略しました

【修辞】「きりふかき秋の丶なかのわすれ水」は、「たえまがちなる」を導く序詞。

【通釈】逢った後

霧深い秋の野中の水にある、人に忘れられてしまった忘れ水のように、隔てが多くて、あなたとの逢瀬は、途絶えがちなこの頃だなあ。

【他集】『新古今集』巻十三・恋三・一二一一、詞書・作者「あひてのちあひがたき女に　坂上是則」

40

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

【通釈】恋人に逢うことがままならぬ秋
この長い秋の夜を、恋の苦しみによって一睡もしないまま明かす我身にとっては、「恋しい人と夢路で逢おう」とさえもまったくあてにできないことよ。
【他集】『後撰集』巻六・秋中・二九六、詞書・作者「題しらず　よみ人も」、四句「夢ぢとだにぞ」、結句「たのまざりける」　『続千載集』巻十二・恋二・一二六九、詞書・作者「題しらず　是則」、二句「まどろまで」
【付】「夢にだにあふ事かたくなりゆくは我やいをねぬ人やわするる」（『古今集』巻十五・恋五・七六七・読人不知）は、この歌と類似の発想である。木船重昭『後撰和歌集全釈』では、「うたたねに恋しきひとを見てしより夢てふ物は憑みそめてき」（『古今集』巻十二・恋二・五五三・小野小町）を踏まえ、その逆を発想する、としている。

41

Web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

42

[redacted]

web公開に際し、
翻刻は省略しました

【修辞】「かへり」は「帰り」と「（裏）返り」の掛詞。

[redacted]

【通釈】別れの部

風の別れに

忘れないでくれ、この別れ路に生える葛の葉が裏返るように、秋風が吹いたならば私はすぐにでも帰ってこよう。

【他集】『拾遺集』巻六・別・三〇六、詞書・作者「題しらず　よみ人しらず」　『定家十体』幽玄様・十六・作者「源重之」『六華集』巻三・秋歌・六四八、作者「読人不知」、結句「又かへりこむ」　『六華集』巻四・冬歌・一一四一、作者「源重之」、二句「別におふる」、結句「又かへりこむ」

【付】是則は、延喜八年正月に大和掾となっているので、この歌はそれと関連があるように思われるが、速断は避けたい。「ふる郷をわかれ路に生る葛の葉のかせはふくとも帰る世もなし」（古典文庫『後鳥羽院御製百首』四一）は、41番歌を本歌としている。なお、『後鳥羽院御製百首』の別系統本である古典文庫『遠嶋百首』に付された注は41番歌（結句「又かへりこむ」）を賈之作としている。

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

[redacted]

【通釈】雑の部

松　鶴　鴟　猿

入り江の松は年老いている　大井の行幸

この川の入り江に生えている松はすっかり年老いてしまったことだなあ、遠い昔にあった行幸のことをたずねてみようかしら。

【他集】『続古今集』巻十八・雑中・一六六二、詞書（「補注」の伊衡歌詞書参照）・作者「坂上是則」　『万代集』巻十五・雑二・三〇八〇、詞書・作者「亭子院にし河におはしましたりける日、江松老といふことを題にてつかうまつりける　是則」　『夫木抄』巻二十四・雑六・一一〇九三、詞書・作者

「大井川　山城　家集　雲葉　坂上是則」　『定家十体』心あ
る部・一〇四、作者「是則」　『三五記』四四、作者「仲文」
『題林愚抄』雑・九〇五六、詞書・作者「同（江老松　続古）
坂上是則」
【付】「江松老」で詠まれた大井川行幸和歌は「補注」参照。
「大井川行幸、入江松年へたる　亀山にいざ事とはんこのえな
るまつの緑はいく世へにきと」（『夫木抄』巻二十三・雑五・
一〇六三七・花山院）は、この時の大井川行幸和歌を意識した
ものといえる。また、「みゆき　たまつしま入江の小松おいに
けりふるきみやこのことやとはまし（『古今六帖』第二・一二
二五）は是則歌の異伝歌。

43

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

44

[redacted]

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

【通釈】鶴
　鶴が中洲に立っている　大井の行幸
山が近いから「あれは降りてかかっている雲だ」と、まなづるの立っている川辺を人はみるのだろうか。
【他集】『新千載集』巻十六・雑上・一六四四、詞書・作者「亀子院にし河におはしましたりける日、鶴洲にたてりといふことを題にてよませ給うけるに　坂上是則」
【付】「鶴立洲」での大井川行幸和歌は「補注」参照。
「大井河行幸に霜のつる地に立てるを雲のおるるかとうたがひ云云　をぐら山おりゐる雲はたに河のかはべのたづのとほめなりけり」（『夫木抄』巻二十七・雑九・動物部・一二五九〇・花山院）は、43番歌を意識したものである。

web公開に際し、翻刻は省略しました

45

web公開に際し、
翻刻は省略しました

【通釈】鴎

[redacted]

鴎が人に馴れている　大井の行幸

川を進んでいく舟に沿って流れているかもめを、水にさす竿がかえす白い浪にまちがえてしまうことだよ。

【付】「馴鴎人」での他の大井川行幸和歌は「補注」参照。『菅家文草』の「双鴎天性静　況遇二得レ心人一　逐レ歩高低至　尋レ声向背馴　飛疑二秋雪落一　集談二浪花匂一　殊恨秋天暮　相離不二敢親一」（巻二・水鴎・一七一）は、「鴎が人になれる」、「鴎を浪に見立てる」の二点で是則歌と重なる。また、「大井河行幸　あそぶかもめ人になれたり　夜とともにいかだをくだす河なればかもめも人におもなれにけり」（『夫木抄』巻三十三・雑十五・一五七五五・花山院）は、この時の大井川行幸和歌を意識したものといえる。

[redacted]

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

[redacted]

【通釈】猿

猿が山峡で鳴く　大井の行幸

秋が深まった山峡で鳴く猿の三度にわたる悲しい声を真夜中に聞いたら、袖が涙でぐっしょりと濡れてしまったことだよ。

【他集】『新撰朗詠集』下・雑・四二五、作者「是則」、三句

「鳴く猿を」、四句「夜深く聞きて」、結句「袖ぞひちぬる」　照。

【付】「猿鳴峡」での他の大井川行幸和歌・漢詩は「補注」参

以下、第三系統本及び第五系統の彰本の巻末にある六首の増補歌を46～51番として補っておく。（底本―第三系統歌仙家集本）。

46

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

47

web公開に際し、
翻刻は省略しました

30番歌と同歌であるので、注は略した。30番歌を参照。

48

web公開に際し、
翻刻は省略しました

【修辞】「そのはらやふせやにおふるはゝきゞの」は下句を導く序詞。

【通釈】そのはらのふせやの帚木が、あるようでいて、実は、ないように、そこにいるようなのに、逢ってくれないつれないあなたであるよ。

【他集】『新古今集』巻十一・恋一・九九七、詞書・作者「平定文家歌合　坂上是則」　『左兵衛佐定文朝臣歌合』二八、題「不会恋」、四句「ありとてゆけど」　『古今六帖』第五・三〇一九、詞書「くれどあはず」、四句「ありとてゆけど」

【付】この歌の影響を受けたものは多い。『源氏物語』帚木巻の光源氏と空蟬との贈答歌「帚木の心を知らでそのはらの道にあやなくまどひぬるかな」と「数ならぬふせ屋におふる名の憂さにあるにもあらず消ゆる帚木」は、48番歌を引歌とし、同巻の巻名の由来ともなっている。『狭衣物語』巻一でも、「その原と人もこそ聞け帚木のなどか伏屋に生ひはじめけん」とある。中古、中世の歌学書では、『俊頼髄脳』、『綺語抄』下、『和歌童蒙抄』箒木、『袖中抄』、『和歌色葉』が、帚木の伝承と併せて、48番歌を引いている（すべて作者名なし、四句「ありとはみれど」）。例えば、『俊頼髄脳』は、「（48番歌引用の後）この歌の心たしかに書きたるものなし。信濃の國にそのはらふせやといへる所あるに、そこにもりあるを、よそにて見ればにはゝくはゝきに似たる木の梢の見ゆるが、近くによりて見れば、うせて皆ときは木にてなむ見ゆるといひ傳へたるを、このごろ見たる人に問へばさる木も見えずとぞ申す。昔こそはさやうにありけめ」と記している。

49

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

31番歌と同歌であるので、注は略した。31番歌を参照。

50

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

51

[redacted]

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

【修辞】「みなそこ」と、「しづむ」、「ふかく」は縁語。
【通釈】水の底に沈んでいるようにうつっている花の姿を見ると、春も深まってきたことだなあ。
【他集】『続古今集』巻二・春下・一五九、詞書・作者「延喜十三年亭子院歌合歌　坂上是則」　『亭子院歌合』三四、作者「是則」、四句「はるのふかくも」

[redacted]

[redacted]

【修辞】「ねて待ちしはつかの月の」は「はつか」を導く序詞。

【通釈】伏して待ち遠に待った二十日月のように、ほんのつかのまであっても逢ったことも、いつ、忘れようか（いや、けっして忘れない）。

【他集】『続古今集』巻十三・恋三・一一七三、詞書・作者「定文家歌合に　坂上是則」、四句「あひみしことを」　『左兵衛佐定文朝臣歌合』三二、題「会恋」、初句「ねでまちし」、四句「あひみしことを」

以下、第二系統本巻末にある五首の増補歌を52～56番として補っておく（底本―書陵部B本）。

52

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

web公開に際し、翻刻は省略しました

【修辞】地名「くらぶ山」の「くら」に「暗し」の「くら」を掛ける。

【通釈】惟喬の御子の家の歌合に

自分の来た方角も知れない――「くらぶ山」は名前通り暗く、木々の紅葉が散って入り乱れ、道も解らなくなるほどだから。

【他集】『古今集』巻五・秋下・二九五、詞書・作者「これさだのみこの家の歌合のうた　としゆきの朝臣」、四句「木木のこのはの」（「もみぢ」の異本も有り）　『敏行集』一〇、詞書「これさだのみこのいへのうたあはせに」、四句「やまのこの葉の」　『新撰和歌』巻一・春秋併百二十首・八六、詞書・作者ナシ、四句「きぎの木のはの」

【付】「このさとにたびねしぬべしさくら花ちりのまがひにいへぢわすれて」（『古今集』巻二・春下・七二・読人不知）や「さくら花ちりかひくもれおいらくのこむといふなる道まがふがに」（『古今集』巻七・賀・三四九・在原業平）などのように、散った花びらによって、道が解らなくなる、という趣向・発想はすでにみられ、この歌もそれによったものと思われる。なお、「わがきつる跡だにみえずさくら花ちりのまがひの春のやま風」（『続千載集』巻二・春下・一三八・藤原定家）、「わがきつるかたもしられずふる雪にくれぬ宿かせ小野の里人」（『洞院摂政家百首』九四一・藤原範宗）はこの歌の影響歌であろう。

53

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

[redacted]

【通釈】屏風の絵に詠み合わせた歌　延喜の御世の歌合に
白い波頭とばかりみえるなあ、住江の岸に残っている白菊の花
は。

【他集】『内裏菊合　延喜十三年』四、作者「是則」、初句
「なみとのみ」　『新続古今集』巻五・秋下・五六〇、詞書・
作者「延喜十三年菊合に　坂上是則」、初句「浪とのみ」
『古今六帖』第六・草・三七五一、作者「とものり」、初句
「なみとのみ」、二句「うちこそみつれ」　『夫木和歌抄』巻
十四・秋五・五八八三、詞書・作者「延喜十三年十月十三日菊
合歌　坂上是則」、初句「なみとのみ」　『袋草紙』下・古今
歌合難・五五〇、作者「是則」、初句「なみとのみ」

【付】花を波に、あるいは波を花に見立てた歌は多いが、菊を波に見立てた歌は、是則以前では、「おなじ御時せられけるきくあはせ（寛平御時菊合）に、すはまをつくりて菊の花うゑたりけるにくはへたりけるうた、ふきあげのはまのかたにきくうゑたりけるによめる　秋風の吹きあげにたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか」（『古今集』巻五・秋下・二七二・菅原道真）が見出されるのみである。

なお、『袋草紙』では広田社歌合の、源忠峯歌に対する「すみよしのきく、かくよめらむ歌不覚。住吉にはしのぶ草、わすれぐさ、松などこそよめ。證歌きゝてぞ勝負可レ申云々」という基俊の判詞に対して「予案レ之、非レ無二證歌一。亭子院菊合、是則歌云」としてあげられている。

54

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

[redacted]

【修辞】「日も夕暮」に「紐結ふ」を掛ける。
【通釈】愛しい女が下紐を結う、ではないが、夕暮れ方の、美しく照らされた菊の花だから、見飽きずも名残惜しくもみえるその花の色だなあ。
【他集】『内裏菊合　延喜十三年』五、作者「是則」　『続後拾遺集』巻五・秋下・三八五、詞書・作者「（延喜御時の菊合に）　坂上是則」　『古今六帖』第六・三七六一、作者「おなじ（是則）」、三句「菊のはな」、四句「あかずぞ秋の」

55

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

【修辞】菊に霜が「置く」意味と、霜が菊の美しい色を「とっておく」意味をかける。
【通釈】菊の花は、冬の野を吹く風に散りもしないで、今日こ

の日まではと霜が置いて、美しい色をとっておいたのであろうか。

【他集】『内裏菊合　延喜十三年』六、作者「是則」、三句「ちりもせで」　『新拾遺集』巻六・冬・五九五、詞書・作者「延喜十三年の菊合に　是則」、二句「冬の野風に」、三句「散りもせで」　『古今六帖』第六・三七六〇、作者「これのり」　『万代集』巻六・冬・一三七二、詞書・作者「延喜十三年十月内裏菊合の歌　是則」　『夫木抄』巻十六・冬一・六五〇五、詞書・作者「延喜十三年十月内裏菊合　是則」、二句「冬の野風に」、三句「散りもせで」

56

web公開に際し、
翻刻は省略しました

[redacted]

【通釈】月の光までも、今宵はにおいたっている――明るく照り映える菊の花が、その天上の月、つまりは帝に、光を添えるように、輝いているから。

【他集】『内裏菊合　延喜十三年』七、作者「是則」（異同に関する問題は、【付】の項参照。）

【付】『新編国歌大観』の『内裏菊合　延喜十三年』（底本は、尊経閣文庫十巻本）では、結句「かのそはるらん」、『平安朝歌合大成　一』の『延喜十三年内裏菊合』では、甲本（同十巻本）で四句「あま照る月の」結句「香のそはるらん」、乙本（二十巻本）で四句「あま照る月の」、結句「かげのそふらむ」と翻刻されている。「香のそはるらん」の場合、「月影に菊の香りが立ち添う」意になり、その方が『是則集』本文より意は通じやすい。